
フラッシュバック判定

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラッシュバック判定

【Nコード】

N0505G

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

若くして一生を終えた男の俗世界でのおはなし。天国行きか地獄行きか、はたまた別な形か、俗世裁判官によって下される決断はいかに？男の現世での行動が重要ポイントとなるため、フラッシュバックでの審議となる。

（前書き）

ずっと以前、チャットで遊ぶ声劇用に書いたものです。なのでセリフだけのコメディなお話です。

「ここは天国ですか？」

「ちやう！にいちやん、そない甘くはないで」

「まさか・地獄じゃないですよね？」

「慌てんでもよろしいがな。それはこれから決めるちゅうに」

「そういうあなたは誰なんですか？神様なんですか？」

「それもちやう！わしやあ裁判官や」

「は？こんな世界にそんな役割もあるんですか？」

「当然やろ。どこの世界にも秩序ちゅうもんが必要なんじゃない」

「知らなかった。」

「当たり前やろ！死んでここに来んとわかるかいな」

「僕は天国へ行けるんでしょうね？」

「なんでそない決め付けるんや？」

「だって僕は小さな子供を救った身代わりで死んでしまったんですよ」

「アホやな。」

「Σ―11(・・;)――1な、なんですかあ？」

「自分も助からな意味あらへん」

「そりやそうですけど・・でも僕はヒーローじゃないですか」

「まあ、偉いことはしたわな」

「でしょう？じゃ天国に行かせて下さいよ」

「それが甘いちゅうねん。お前はそんなちっぽけな善より罪の方が重いんや」

「Σ(・・・*エエツ！？僕に罪なんてありませんよ！」

「気づかんだけや」

「ところであなたは関西出身なんですか？」

「何ゆうつんねん。現世にいた人間がここで裁判官なはずないやろが！」

「そんなこと知りませんし・・（「」；ヒヤリ」
「単にこの方言が気にいっただけじゃ」

「（ノ——）ノコケツ——」

「お前は自分の罪を全然わかってないようやな」

「なんかあるなら教えて下さいよ。証拠でもあるんですか？」

「お！言うたな。そんなに証拠を見たいんか？」

「天国に行きたいですから」

「うむ。だがそれだけではない。生まれ変わりの裁判も含まれてるんや」

「Σ（・・・*エエツ！？生まれ変わるんですか？」

「罪が重いと200年後か1000年後やな」

「それってずいぶん差がありすぎません？（「」；……」

「罪を償うにはそれくらい我慢せんとな」

「でも僕はきつとそんなことはないと思うんですが・・」

「（「——」）フフ。もう一度聞くで。証拠が見たいんか？」

「はい。見ます！その上でならどんな判決でも納得できますから」

「よっしゃわかった！」

「あれ？急に場面が変わりましたよね？ここは。」

「お前んちやないか。どこに目えつけとんねん」

「あ・・そういえば僕がまだ幼稚園の頃に住んでた懐かしい家だ。」

「

「食卓見てみい。ほら、お前や」

「あー！ホントだ。向こうからは僕たちが見えないんですか？」

「見えたらお前は霊能者やないかい！お前はそない鋭い男やない。自惚れたらあかん」

「は、はい・・（「」；……」

「ほら見てみい。お前、人参食べ残しとるやろが」

「そ、それが罪なんですか？（＾□＾；A」

「このあとじゃ！よく観察せえ」

「あー！僕が・・母親のいない間に残した人参をゴミ袋に入れてる・
」

「そうや。今母親はトイレに行つとる」

「そうだ。思い出した」

「しかもこの生ごみを資源ごみの袋に入れとるやないかい！これは重罪や」

「そんなあ・・」

「人が見ていないのを良いことに、悪行三昧やな」

「悪行三昧って・・これだけでそんな言われようはないじゃないですか！！」

「じゃ次」

「あれ？ここは・・僕の部屋だ。高校の頃に引っ越して来たばかりの家だ。」

「ほれ。またお前が何かやつとる」

「机に向かつて勉強してるじゃないですか！真面目で優等生だったんです僕は」

「（@^ ^@）ノあはは。聞いてあきれるのお。もっと近づいてみいゃ」

「うつー！Σ（・”・；）こ、これは。」

「エロ本見とるやないかい！」

「たしかに・・；^ ^ A アセアセ・・」

「それになんや！椅子に座って前屈みで手が小刻みに動いとるやないか！何しとんねん！」

「Σ―11（「；）―1こ、こんなとこ見せなくてもいいじゃないですか！プライバシーの侵害です！」

「ひとりエッチしてからに何ぬかしとんねん！！」

「思春期の高校生なんだからしょうがないじゃないですか！これも罪なんですか！？」

「当たり前やろ！お前のせいで子種が数百万個死んどるねんど。殺人罪やな！」

「エエエエエ（´A`）エエエエエ。こんなこと誰でもしてますよお！人には言えないだけですよお！」

「他人が人に言えないことを何でお前が知っとんねや？おかしいやろが！」

「あー、もう！！」

「なんならまだ次行くか？もつと恥ずかしいことがあっても知らんで」

「Σ（ノ。ノ）ハウツ！いえ、もういいです。」

「うむ。最初からおとなく罪を認めればえかったんや。アホやな全く」

「・・・それにしても・・・この世界では僕の生まれたときからずっと観察してるんですか？」

「どアホ！そんな暇やないわ。お前の守護霊から定期申告があんのや」

「え？でも普通、守護霊って守ってくれるはずじゃないんですか？」
「そうや」

「でもこれじゃただのチクリ魔じゃないですか！」

「このたわけが！守護霊さんに向かってとんでもないことを言いよる」

「でも。。。」

「よし！判決は厳しいものになるから覚悟しとき！」

「い、いつ結果が出るんですか？」

「今や」

「はやっ！（。〇。；）」

「せやな。お前は食べ物を粗末にしたから、まずは地獄で人參を50年間食べ続けえや！」

「え？そんなんでいいんですか？」

「どういう意味や？」

「いえ、地獄つてもっと怖い目に遭うものばかり。」

「一本でも残したら本当に針千本飲むことになるんやで。ええんか？」

「ひえー！（ 〇 ）」

「それとお前はひとりエッチが多すぎる」

「そ、そりやあずつと彼女いなかったから。」

「そんなん理由にならんわ。お前は死ぬまでに5738回やっ取る！」

「数えてたんですか！！？」

「わしやない。お前の守護霊や。」

「見えなくても見られてるもんなんですね。（ ； ； ）」

「そのうち6回は親に見られとるようやな」

「Σ（ ； ； ）！！そんなの知らなかった。」

「ほならお前への罰を言い渡すで」

「は、はあ。」

「体全身くすぐられながら人参を50年間食い続けてみ」

「吐き出しちゃうじゃないですか！」

「吐いたら針千本や」

「そんなのイジメだあ！」

「地獄はイジメる所や。悪いか？」

「ああゝ僕はとんでもないことをしてしまったのかあ・・・」

「お？反省したんか？」

「食わず嫌いなんてするんじゃなかった。」

「やつと素直になったようやな」

「女の子にも積極的にアタックすれば良かった。」

「その通りや」

「罰は受け入れます。申し訳ありませんでした」

「それを最初から聞きたかってん」

「（？―？）あれ？また場面が変わった。」

「もうすぐお前の生まれ変わりや」

「え？僕は罪を償うのでは？」

「今までのテストや。反省するまでの時間を計ってたんや」

「じゃ人参食べなくてもいいんですね？」

「当たり前や。お前はもう死んどるねんぞ。何も食わんでもこれ以上死なんわい」

「たしかにそうですね（^―^；）」

「お前の13回忌後にアメリカ人として生まれ変わる事になったで」

「えっ？日本人じゃないんですか？」

「ええやないか！生まれたときから英語が身につくんやで」

「いやそうじゃなくて・・・（^□^；A」

「字幕スーパ―見んでもハリウッド映画が理解できるんやで」

「アメリカ人で生まれたら普通そうじゃないですか」

「まあそうやけどな」

「（（ノ―ω―）ノバタ」

「あと13年あるからのんびりしとき」

「それまで僕は何をしていればいいんですか？」

「人参食うとったら来世は好物になるはずや」

「へえ、そうなんだ。」

13年後、ニューヨークで女性として生まれ変わったひとりの人間がいた。

そして彼女は24歳のとき、ある回転寿司屋のニューヨーク支店に勤めている日本人男性と結婚した。

どうやらこの男は関西出身らしい。

「ところでお前の作る料理はどれも人参がギョウサン入っとるねんな」

「うん。だってあたし、野菜の中でも人参が大好きなんだもん。おかしい？」

「おかしくないわ。特訓した甲斐があつたうちゅうもんや」

「へ??何のこと？」

「いや、何でもあらへん^^;」

「あたしって、ロバか馬の生まれ変わりかしら？」

「そらちゃうわ。お前はたぶん、ジャパニーズ男の生まれ変わりや」

「意味分かんない。人参と結びつかないし」

「わからんかったらええねん」

「だいいち侮辱よ!あたしの前世って、出っ歯で黄色い顔したドチビの男だっというの？」

「お前のイメージする日本人はブ男しかおらんのかい！」

「アジア人はみんな同じ顔に見えるもの」

「サルと同じ扱いやないかい」

「うん」

「(ノ——)ノコケツ!じゃなんでわしと結婚したんや？」

「あなたテクニシャンだったから」

「・・・お前はいつの時代もスケベやな」

「何よそれ?どういう意味？」

「だからわからんでええねん」

「教えてよー!」

「こいつはもう生まれ変わらんでええわ…」

「ちよっとボソボソ独り言わないでよー!」

「さ、寝るで」

「あん。すぐベッドに行きたがるんだから。もうエッチ!」

「どっちがじゃー!!、(、)(ノ)」

(おわり)

（後書き）

少しは笑ってくつろいでいただけたでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0505g/>

フラッシュバック判定

2010年10月8日15時11分発行